

令和 7 年度

「県・市町村青少年相談担当職員研修会」

参加者アンケート結果

群馬県子ども・若者支援協議会

令和7年度 県・市町村青少年相談担当職員研修会 アンケート結果

日時 令和7年12月25日(木)

13:00~16:40

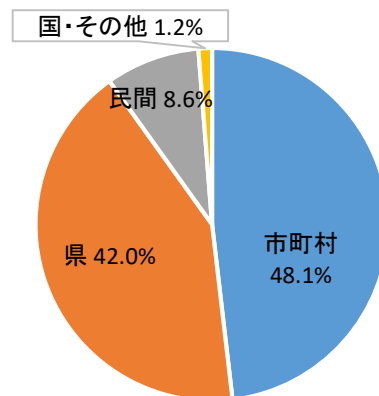
会場 群馬県公社総合ビル

○研修参加者 170 人
○回答者 81 人
○回答率 47.6 %

Q1 回答者の所属

	人数	割合
市町村	39	48.1%
県	34	42.0%
民間	7	8.6%
国・その他	1	1.2%
合計	81	

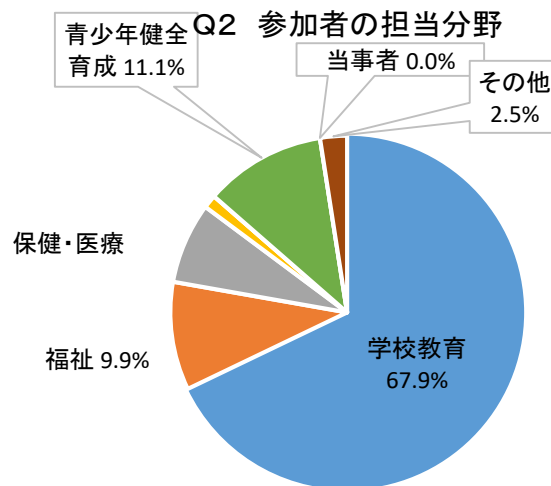
Q1 参加者の所属



Q2 回答者の担当分野

	人数	割合
学校教育	55	67.9%
福祉	8	9.9%
保健・医療	6	7.4%
雇用	1	1.2%
矯正・更生保護	0	0.0%
青少年健全育成	9	11.1%
当事者	0	0.0%
その他	2	2.5%
合計	81	

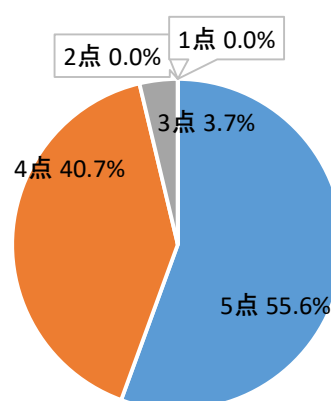
Q2 参加者の担当分野



Q3(1) 研修会の内容について、あなたの満足度はどれにあたりますか。

満足度		人数	割合
高 ↑ ↓ 低	5点	45	55.6%
	4点	33	40.7%
	3点	3	3.7%
	2点	0	0.0%
	1点	0	0.0%
合計		81	

Q3 情報提供 満足度



(2) 県立学校「通級指導に訪れる生徒の卒業後を見据えた支援」について

群馬県立前橋高等学校 教諭(高校通級担当) 富所 里美氏

○意見・感想等

1	<p>・小中学校から通級指導を引き継げる体制があることを知り、非常に大切だと感じた。この点を知らない生徒・保護者も多いかもしれないので、多くの人に知ってもらいたいと思った。</p> <p>・印象に残った点: コンビニで外国人従業員対応として、仕事のやり方を視覚化することで流れが分かる。そのシステムづくりが、特性のある子にとっても有効であると感じ、長続きしている。就労場所においてそういったシステムづくりを取り入れてはどうか。</p> <p>→講師の意見になるほどと思った。</p>
2	<p>心身共に安定した高校生活を送るため、不安や悩みなどのストレスに対して、自分に合った対処法や気分転換の方法を身に付ける個別指導が受けられるのは素晴らしいと思った。高校時代に自分をコントロールする力を身に付けておく事は、卒業後の社会生活で生じる様々な問題に対処する力を育むと考える。また、進路のミスマッチを防ぎ、本人の特性にあった進路選択をする事は、その後の社会生活で感じやすい『生きづらさ・困難さ』を低減できる。時間をかけて進路選択をしていく事は大切に思う。『送り出す支援』として、社会に出る前に、自己理解・コミュニケーション力・問題解決能力等の社会性を身に付ける支援を受ける事は誰にとっても必要な事ではあるが、特に発達特性を持つ子どもには必要不可欠であると思う。</p>
3	<p>自立、就職を目前に控え、職業準備性ピラミッドはとても参考になりました。まず生活・健康管理ができないとその先の部分にはいけない。下から整えていくというのには納得でした。そのうえで、実際の活動内容や支援方法などを教えていただけてよかったです。県立だけでなく、私立でも同じような支援が受けられるといいのではないかと思います。</p>
4	<p>私も勤務校で特別支援コーディネーターとして通級指導に関わらせていただいています。今年度3年生の進路指導について、保護者やハローワーク、相談支援事業所・地域活動支援センターの担当者を交えた支援会議を行い、職場体験も実施しましたが、なかなか進路決定することが難しい状態です。通級指導担当の先生にも色々アドバイスをいただきながら指導を継続していますが、本人の特性に合った進路が決定できるように最後まで支援したいと思います。通級指導担当の先生方は本当にすごいと感じます。富所先生にも久しぶりにお会いできて嬉しかったです。</p>
5	<p>スライドの情報量が多く、スクリーンでも手元の資料でも見づらいものが多かった。</p> <p>本校にも通級に入っている生徒もあり、通級の時間で指導していただいたことを学校生活のなかでも生かしていくことが理想であると思われる中で、なかなか職員の理解が得られないことも少なくないので、最後の鈴木先生のお話にもあったように、1対1の指導が重要であるということが職員にもっと浸透していかなければならないと感じている。少なくとも研修会に参加している方は理解があるもしくは理解しようとする方だと思うので、自校での研修だけでなく、様々な場面で通級や特別支援について、もはや特別ではないということを伝えていただきたい。</p>
6	<p>現在小学校勤務ですが、この先どのような進路を選択できるのか不安に思っている児童や保護者の方がいるので、今日のような高等学校の通級教室についてなど必要な情報を知ることができよかったです。医師による診断の必要がないということで、生徒のニーズに合わせた支援をしてくださりありがたいと感じました。高等学校やその先社会に出てからも引き継がれていく個別の支援計画や指導計画の重要性を感じました。</p>

(3)民間学習塾「発達特性のある子ども・若者に対する学習支援で大事にしていること」

Leaning Diversity Lab代表 新井 清義氏

○意見・感想等

1	学習教室では、発達障害・学習のつまずき・不登校など様々な子供が訪れる。学習支援で大事にしている事は、普通になるための支援ではなく、自分の目標をかなえる力を養う支援。『自立』ではなく『自律』を促す。『自律』とは、自主的に物事に取り組み、自分の立てた規範に従って行動をコントロールする事であるが、テスト結果などで人との優劣を比較をするのではなく、取り組んだ過程を褒め、スモールステップで成功体験を積む事を大事にしている事がわかった。学習教室には、通常学級と支援級の間で揺らぐ生徒が多数おり、その中の発達検査を受けた生徒の多くが境界知能であり診断が無くて困っている、また、診断が出ない子供の行き場所が限られているとの事だったが、診断の有無にかかわらず、グレーゾーンの子ども達を含め、誰もが必要な配慮を受けながら、希望する社会に出る力を養う機会を得る事が、全ての人が包摂されるインクルーシブな社会であると感じた。
2	このような取り組みがあると知り、大変頼もしく思いました。特性のある生徒さんで普通の学習塾では通いづらい生徒も多いと思います。境界知能の話がありましたが、高校の現場にうかがうと、現実的に境界知能の生徒さんが多いと感じます。発達特性がある生徒の通いやすい塾や相談できる場所、落ち着いて過ごせる場所が増えると良いなと思います。
3	新井様がおっしゃっていたように診断がなくて困っている子ども達は、高校でもとても多いと感じます。そのために入学しても自分の思うように学校生活を送ることができず、進路変更となってしまう生徒も毎年数名いる状態です。困りごとがある生徒が安心して学校生活を送れるように、教員が発達障害の特性等の知識をもち、職員全体で個に応じた声かけや支援ができるように研修を行った方が良いと感じました。
4	発達特性のある子どもたちが通う塾があることを初めて知り、とても良い機会だった。診断が出ない子どもたちというのは、学校現場においてはもちろんこちらの見立てなので「きっとそうだろうな」というものではあるが、本当に多く存在していると感じる。「安心な環境を作るために意識していること」の4点については、学校現場においても必要なことで、個人的には意識していたことではある。しかし、現場の多忙化や個別対応の多さから、特に1クラス40人5～6クラス規模のいわゆる進学校ではない学校では、これらを意識して指導していくには限界があり、ここでも必要としている子どもたちに必要な支援が届かないということが発生しているように感じている。これは、ここ数年において長らく感じていることであり、故に、民間学習塾の需要があるのだらうと納得した。一方で、特に公立学校がどうあるべきかという問題も色濃く感じられ、鈴木先生の「大人数の教育では比較され、みんなと同じようにできないが生まれる」ということに強く共感した。
5	「褒める」ということを安易にしないとのことでしたが、私は、成功体験の少ない子たちだからこそ沢山褒めてしまっていました。塾できめ細やかなサポートを受けられることは生徒やその保護者にとっても非常に良い時間になると思います。私の学校の生徒が塾に通っていたら、塾と学校間で情報共有をしてよりよい学習環境を学校でも整えられるようにしたいと感じました。
6	学校現場でも、診断がつかないけれど支援が必要という児童が増えています。通常学級の中で一人一人に合った環境を整えることはなかなか難しいですが、「安心な環境を作る」ということを全職員で意識して、困難さを抱えた児童が自信をもてるように、また、だれかに助けを求められるようにしていきたいと感じました。
7	高校入学後のミスマッチでグレーゾーンの生徒が進路変更をしていきます。大半が保護者が進めたから入学したけど自分は勉強はついていけないから違う学校が良かったと話します。事例のランクを下げての自己肯定感を高める方法はとても良いと思いました。本人と保護者の理解も大事だと思います。

(4) サポステ「若者たちが感じている『はたらきにくさ』を解消するための支援」について

ぐんま若者サポートステーション総括コーディネーター 唐澤 文彦氏

○意見・感想等

1	<p>講談者と同じ職場で働くスタッフの一員として、日頃の感想を述べます。</p> <p>若者たちが感じている『働きにくさ』の根底にあるものとして、これまでの失敗体験による自信喪失や自己肯定感の低さによって生じる持続的な『不安感』があります。そのために、二次障害的な症状が強く出ている若者も多くいます。社会に出てから、こだわりの強さ・曖昧な指示が解らない・臨機応変が苦手・優先順位がつけられない・先の見通しが立たない等々、なかなか変えがたい特性が表面化し、より困難さが増してしまいます。発達障害はスペクトラムであり、それぞれの持つ特性や強弱によって様々な困難さがあるが、自己理解が進んでいくと、自分で意識して変えられるもの、対処法を身につけて解決できる事、反対に自分では気づくのが難しいもの、協力を得ないと解決困難な事があることに気づく。これらに対して、適切な援助希求(他者の支援を求める)ができるようになることで、『働きにくさ』を軽減する事ができる。サポステでできる支援には限りがありますが、本人の自己理解が進み、個別性を周囲に伝える事ができ、対処法を身に付けることができたその先に、安心して働き続けられる居心地のよい職場環境を手に入れらる事ができると考えています。</p>
2	<p>本校にも就職を希望しているが卒業後の進路がまだ未定の生徒がいるため、3学期も継続して指導を行います。本人とミスマッチな会社に入社して働きにくさを感じたり、うまく馴染めず早期退職してしまうよりは、いつか本人が納得して働けるようにサポステさんのような支援機関を利用させていただくのも良いのかなと感じました。保護者面談でも情報提供したいと思います。</p>
3	<p>実際に一般就職が難しそうな生徒がいるので、とても参考になるお話だった。どうしても面接や作文等の対策は、それらを通して成長する機会でもあるという考えのもと、みっちり対策を行い、言葉を選ばずに表現すれば「下駄をはかせる」ような面接や作文の文言をつくることもあるので、お話にあった「本人の失敗を奪いすぎない」ということは、非常に参考になった。これは、就職や進学対策に限ったことではないので、今後の指導に活かしていきたい。</p> <p>サポステについても、就職が決まった生徒でも先々が心配な生徒もいるので、紹介しておくことは大切だと感じた。</p>
4	<p>私たちの周りにも「無業」といわれる方が多く見受けられます。様々な理由によりそうした状況に置かれているわけですが、サポステのような取り組みがもっと広がっていけばよいと思います。そのためには、市町村職員もそうした輪の中に積極的に参画していく必要があると思いました。</p>
5	<p>サポステのような支援施設があると、「はたらきにくさを感じている若者」にとって、一時的な居場所になるのでありがたいです。そのような若者は、また就職が決まっても、また離職してしまうことも多く、再々サポステにお世話になることもあると思います。そんなときも、暖かく受け止めていただきたいと希望します。</p>
6	<p>これまで特別支援学級で担任した児童が、将来仕事に就いた時、高い確率でこのような働きにくさにぶつかり、苦しい思いをするのだらうと想像しました。ぐんま若者サポートステーションさんのような頼れる場所が増えるとよいと思いました。</p>

(5)「仕事に就きたい、自分を変えたい、変わりたいと思っている若者の社会参加を実現する支援」

一般社団法人 ワークスタジオ群馬 理事 笠井 勇哉氏

○意見・感想等

1	・印象に残った点：各講師が指摘した共通していた点 働きにくさとして、曖昧な指示がわかりにくい、例えば「しっかりきれいにしておいて」という指示。 →こういった指示は、特性があろうとなかろうと同様であり、支える立場として気をつけるべきであるということを知り、周知できたらと思った。
2	とてもパワフルで、引き込まれる話でした。働き方のフレームを変えるという感じがしました。いろいろな働き方、時間・場所・どのようにも自由に選べるような企業や機会が、選択肢が増えれば、選びやすくなるので、このような働き方のプラットフォームを地方でも、広めてもらいたいと思いました。
3	就労移行支援という支援先を知らない人は多い。多くの人に知ってもらいたいと感じた。特に、グレーゾーンと言われる生徒たちは、自分の特性としっかり向き合えないまま就職をする、その結果合わずに辞めてしまい、悪循環に陥ってしまうこともある。
4	支援する側のスキル向上が本当に大切だと思いました。ただ支援しているという意識ではなく、どうしたら対等な人間としてより良いコミュニケーションをとってやっていけるのか、という「人として」大切な事を大切にしていたら、素晴らしいツールを開発して活用して、というストーリー。多くの人に知ってほしいと思いました。
5	不登校の生徒を卒業させるとき、社会に出て困ったときの相談場所があることを教えておきたいとおもいました。まだまだ就職は個人の責任、と思いがちな世間の風当たりが強い時代。グレーの方にとって就活はマニュアルのない分かりにくい世界だと思います。
6	指示を出す側が、指示を出す前に、MEMOを使う、このことが目から鱗でした。感動しました。実践しようと思います。

(6)「本人の特性に配慮した働き方を見つけるための『合理的配慮』の実現」について

株式会社ヒルズ伊勢崎 代表取締役 石原 秀樹氏

○意見・感想等

1	<p>合理的配慮は『架け橋』であり、本人の特性(内側)と社会のルール(外側)の間にある『溝を埋める作業』であり、その人が「何にぶつかっているか」に注目していく。合理的配慮は、「特別扱い」する事ではなく、スタートラインを揃えるための「環境調整」である。また、就労支援の現場で「生きにくさ」を感じる若者の共通に見られる特徴として、「見えないルール」を読み取ることの難しさ、「ほどほど」が苦手で完璧主義、感覚の過敏さと脳の疲れやすさ、シングルフォーカス(目の前の一つの事に過集中し過ぎる)、支援が必要なのに「助けて」と言えず隠してしまう等が挙げられていたが、これは私も、若者の就労支援をしながら、日々感じている処である。「本人のできない」は、「能力不足」ではなく、「環境とのミスマッチ」であると捉え、施設では①人間関係の配慮②業務の配慮③環境の配慮をしている。合理的配慮の事例として、業務面・コミュニケーション・環境調整の具体例が挙げられており、大変解りやすかった。事業所でこのような取り組みをしている事を知り、大変ありがたいと感じた。</p> <p>そもそも障害者の「合理的配慮」とは、他の人と平等に社会参加できるように、働きやすさを整える工夫をする事であり、この障害者のために準備した仕組みが、障害の有無に関わらず、社会全体にとって働きやすい職場環境作りに繋がっていくことに感銘を受けた。</p> <p>障害者雇用が企業にもたらす効果は、だれもが働きやすい職場を得る事に貢献している。</p> <p>とすれば、診断がなされないグレーゾーンの若者にとっても、このような優良企業が増えていく事は社会的な受け皿として有効であると感じた。</p>
2	<p>企業の社長さんは迫力があるなとまた思いました。困っていることではなくて、今の作業に時間がかかることを尋ねることや仕事は分業すれば、特性や障害がある人も仕事は十分できるという話は学校現場でも使えることだなと思いました。つい、できないことに注目して、困っていないかと聞きがちですが、時間がかかるやというやり方がいいと聞かれれば答えるのに抵抗がないと思いました。</p>
3	<p>石原様の持ち時間の中で最大限に情報提供してくださる熱い思いが印象的でした。石原様のように職場のリーダーが働きやすい環境を整えてくれたり、個々の良さを評価してくださると、特性のある方も安心してやりがいをもって仕事ができるのだろうと感じました。特性のある方も「配慮すれば力を発揮できる人」という視点をもつことが重要という考え方に感銘を受けました。教育現場でもそのような視点で生徒の指導を行っていきたいと感じました。</p>
4	<p>学校現場において、「合理的配慮」を「特別扱い」と捉えている職員が非常に多く、「ADHD(ぼい)」「ASD(ぼい)」というラベル貼りにとどまり、その後続く「どう支援・指導するか」につながらないことが非常に多い。教員は、特別支援に関わる研修や実際にそういった生徒の対応という機会にある意味では恵まれており、理解が進んでもよいはずなのにそうではない現状がある。失礼な言い方になってしまうかもしれないが、石原さんのように民間の方でもこんなに理解して配慮してくださる方がいらっしゃるのかと大変驚いたのと同時に嬉しくもあった。「偏見は無知が故に起こる」ということを教員がどれほど理解しているのか…。こうして学校の外のお話を伺うことで、理解が進むことも大いにあるだろうと思うので、教育相談や特別支援の担当の教員以外にもこのような機会が設けられることを切に願っている。</p>
5	<p>企業と学校で、どのようなことが得意でどのようなことが苦手なのかを情報共有できる場がほしいと思いました。できることが沢山合って、良いところが多いのに、なかなか面接だけでは伝わらないことが多いので、そういう場があれば嬉しいです。</p>
6	<p>会社の「至らなさ(課題)」を障害を持った人が鏡のように映し出し、それを会社として改善(工夫や対策など)した結果、みんなにとって良い環境になった、ということが印象的でした。これはどのような現場にもあてはまるように思います。</p>

(5)「意見交換」について、感想等自由に記入してください

テーマ「社会で生きにくさ、働くことに心配や不安を感じている子ども・若者を支援する」

～ グレーゾーンの子ども・若者の「支援」 学校から社会へのつながりを考える ～

■ コーディネーター：上原篤彦さん(共愛学園前橋国際大学短期大学部 教授)

■ 助言者：鈴木基司さん(みどりクリニック院長)

■ 登壇者：

富所里美さん 新井清義さん 唐澤文彦さん 笠井勇哉さん 石原秀樹さん

○意見・感想等

1	様々な立場の講師が情報提供し、意見交換できたことが非常に意義深かったと思います。様々な支えがあるが、「一人一人を大切に」という共通項を感じました。職務としても、一人の親としてもありがたいと感じました。そういった認識を周知できたらと思います。青少年相談窓口の担当としては、この認識を持ち、専門窓口につなげさせていただきたいと思います。
2	学校と企業の連携により、困難を抱えている若者も社会の一員として頑張っていけるような支援体制の充実を期待します。
3	入り口と出口の支援がつながる場面を見させていただき、大変感銘をうけました。続いていく人生のなかで支援者が途切れず本人を支えられる社会であってほしいと思いました。
4	上原先生の司会進行がとてもスムーズわかりやすかったです。学校・企業とのつながりの可能性を感じました。自分の取説を書いて、上司と配慮してほしいことを情報共有することは自分もやってみようかと思いました。最後の医療からの視点で学校に行ける行けない、特性があるないではなくて一人の人間として認め、この子がどうやって生きていくのかを考えようということばはストンと腑に落ちました。自分の受け持つ範囲でしか、支援はできないですが、その子の人生は続いていくので先の支援者にバトンをどうやって渡そうという視点は大切ですね。
5	失敗する経験を奪いすぎないという言葉にハッとしました。人を育てる職業にいる自分に、とても大切な視点を教えていただいたと思います。
6	繰り返しになるが、最後の鈴木先生のお話にあった「二次的なもの(不安や自己肯定感の低下等)は、小中の一斉教育によって生まれるのでは？」というところに尽きる。義務教育とはいったい何なのか。比較の中で自信を失い、不登校になって、義務教育期間に学校教育を受けられない子どもたちがたくさん存在している。そのような子どもたちが、そのまま高校生になったとき、彼らはすでに自信ややる気、自己肯定感を失っていることが非常に多い。高校という3～4年程度では、それらを取り戻し、彼らが彼らしく生きていくための時間としては非常に短く、そもそも9年間という非常に重要な義務教育期間を取り戻すことは不可能であると感じている。もちろん、その状態からでもできることはたくさんあり、諦めているわけではないが、義務教育とは何かということから、学校の在り方を考える必要があると常々考えている。
7	現場の実際の声や知恵をたくさん聞く事ができて有意義でした。鈴木先生の「1対1で、肯定的に。1人の人を大切にしてい、それを成立させるシステムを」とのお話に激しく共感します。学校は「みんなと同じ」を目指すより、1人を大切にする姿勢で子どもに寄り添う事ができると変わるのではないのでしょうか。それぞれの子どもが、将来に明るい希望をもって進めるように、さまざまな立場の大人のつながりが大切だと感じました。
8	それぞれの立場からのお話や視点を知ることができ、たいへん有意義でした。会社の仕事内容を調査して、その特性に合う仕事をプランニングし、企業にアピールできる人が必要と感じます。特別支援学校と会社のそれぞれのスキルを情報交換する場もあると良いと思いました。また、唐沢様が通級担当者に見学に来ませんかと言ってくださっていましたが、むしろ高校の進路指導主事、特別支援教育コーディネーター、クラス担任へのアプローチをお願いしたいと思いました。
9	色んな場所が繋がっていくことが目の前で分かりとても嬉しくなった。こういう機会が保護者にもあるともっと受け入れやすいのではないかと感じました。